【カテゴリーⅠ】

日本建築学会計画系論文集 第79巻 第705号, 2443-2452, 2014年11月
J. Archit. Plann., AIJ, Vol. 79 No. 705, 2443-2452, Nov., 2014

水郷の商都・佐原における「記憶の枠組み」についての研究
－「歴史的なもの」との関係をふまえた考察－

STUDY ON THE MEMORY-EVOKING FRAMEWORK OF SAWARA, MERCANTILE HISTORIC CITY AT WATERY ENVIRONMENT
－ Considerations of the relationship between memory and historicity －

窪田亜矢*
Aya KUBOTA

Sawara is a mercantile historic city at watery environment along the Tone River, which had been flourished from Edo era to the middle of Showa Era. Some parts of it have been designated as cultural property, namely a preservation district for a group of historic buildings. Through minute interviews of local people, the memory-evoking framework of Sawara is clarified. It consists of four conditions, 1) disappearance, 2) surviving figure, 3) inherited use, and 4) correspondence of memory and historicity.

The memory-evoking framework and the system of historic value are very similar to but different each other. The local community can imagine how the life was in their habitat just by touching their surroundings. Not just the historic environment that is already put in the formal preservation system, but also the fabrics with collective memories of local people are important to succeed the meaning of its lived environment.

Keywords: *Sawara, Historicity, Memory-Evoking Framework, Preservation Districts for Group of Traditional Buildings*
佐原, 歴史的なもの, 記憶の枠組み, 伝統的建造物群保存地区

1. 研究の背景と目的
1-1. 文化財概念の拡張と問題意識

文化財は、各時代の価値観を反映する法制度によって規定される。そのため文化財の範疇は拡張し続けてきた[注1)]。しかし、比較的新しい登録文化財の基準にも「原則として建設後50年を経過し」ていることが挙げられるように、文化財の価値は、対象が時間を経過して残存していることにあるという点は一貫している。50年という時間は、文化財としての評価が定まるための時間と解釈されている。

このような一定の時間を経て、評価が定まり共有されるようになった過去として整理される歴史と、現存する無形／有形のもので明示的な審査基準に合致した文化財を、本論文では「歴史的なもの」として捉える。近年、「歴史的なもの」は保存対象に留まらず、まちの活性化に生かすべき資源として位置づけられるようになった[注2)]。

一方、歴史修正主義をめぐる議論においては、立場が違えば歴史認識は異なることが広く認知されるようになった。その結果、「歴史的なもの」に似て非なるものとして「記憶」への関心が高まってきた[注3)]。評価が定まらないからこそ保存もしくは継承すべきものがあるのではないだろうか。

1-2. 記憶の多義性と現在性

国語辞典によれば、記憶とは「過去に経験した事の印象や一度意識に止めた事の内容が脳裏にとどめられ、随時再現出来る状態にある(ようにする)こと」[1)]である。しかし記憶をめぐる研究は、急激な進展をみせており、心理学、社会学、地理学、民俗学、医学などの分野の蓄積を以下に端的に整理する。

記憶は、情報を覚えること（記銘）、それを脳で保つこと（保持）、それを思い出すこと（想起）という三段階によって為される。記憶は、過去の経験によって記銘された記憶がそのまま保持されるというだけではなく、現時点に存在する「記憶の枠組み」に触れることで、一度忘却した記憶でも想起され得るし、他人の記憶を自分の記憶として記銘し得るダイナミックなものである[注4)]。ここで「記憶の枠組み」とは、記憶が上記の三段階を踏む契機となる対象である。

「歴史的なもの」が過去に生じた一つの物語として認識され、評価が定まったからこそ法制度によって公的に保存される対象に位置づけられるのに対して、記憶とは「記憶の枠組み」に触れることで多様な個人が現在進行形で想起する多様なものである。さらに個人の記憶が地域社会によって共有されることも生じる。すなわち記憶においては、多義性と現在性が重要な特徴である。

1-3. 都市デザイン分野における既往研究の整理

都市デザインに関する既往研究では、記憶や「記憶の枠組み」はどのように位置づけられてきたのだろうか。

ドロレス・ハイデンは、マイノリティに着目しつつ、市民の多様な記憶をパブリック・ヒストリーとして包含する都市景観創造の実

* 東京大学大学院工学系研究科地域デザイン研究室
特任教授・工博

Special Appointment Prof., The Territorial Design Studies Unit, Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering, The University of Tokyo, Dr. Eng.

践を述べる[2]。ここで「記憶の枠組み」とは、パブリック・ヒストリーの舞台である都市そのものである。

後藤治は、都市の記憶が失われる前に歴史的建造物を活用していくべきだと述べ、建造物の立地や果たしている機能が記憶の中枢にあると捉えており「記憶の枠組み」に含む考え方を示している[3]。

郭一止は、エコミュージアムとして実践するまちづくり運動の中に記憶の想起や共有を図るメカニズムを読み取っており、記憶の継承に重きを置いた研究を行っている[4]。

1-4. 研究の目的と視点

以上を踏まえて、本研究では「歴史的なもの」として保存されている町並みを生活環境としてきた佐原(千葉県香取市)を対象として、「歴史的なもの」を整理して、「歴史的なもの」と記憶の関係をふまえて、環境における「記憶の枠組み」としての価値を考察する。そうすることで「歴史的なもの」と「記憶の枠組み」の共通点と相違点を明らかにして、「記憶の枠組み」を担保する都市デザインの知見を得ることを目的とする。

1-5. 質的研究という方法論

本論文は質的研究である。質的研究とは、現実社会を理解するために、量的研究と相互に補完するものである。そこで本論文では、質的研究の源流として位置づけられるエスノグラフィーという手法をとる。エスノグラフィーは、自由度が高く標準化の度合いは低い方法論だが、七つの特徴とされる以下の点を遵守する[5]。これらの特徴についての記述で使われている「現場」とは「人々が何かを実際に行っている場」もしくは「ある事がらが実際に起きている場」として定義されており、本論文では佐原という地域社会として置き換えられる。

1)現場を内側から理解する→文献からだけではなく、インタビュー等によって佐原の現状を理解する。

2)現場で問いを発見する→「記憶の枠組み」における論点という問いを佐原の理解から組み立てる。

3)素材を活かす→佐原のまちとそこで語られた記憶という素材を活かす。

4)ディティールにこだわる→言葉の選択や話し方から汲み取れるものも考察する。

5)文脈のなかで理解する→文献等も併用しながら佐原の歴史すなわち時間的文脈と広域的位置づけを理解する。

6)具体的な事象Aを通して理論的なテーマBを論じる→記憶Aと、それを通じた「記憶の枠組み」Bを論じる。

7)知見の橋渡しをする→対象地の「記憶の枠組み」としての空間を価値化して、対象地以外でも同様の価値が共有され得る。

2. 佐原における「歴史的なもの」

2-1. 「歴史的なもの」の評価

佐原における指定文化財は表1の通りである。個別の商家の他、伊能忠敬関連や祭り、漁撈に関するものが挙げられている。

佐原における伝統的建造物群保存地区(以下、伝建)対策調査は、制度ができた1975年の前年より始まった。同じ頃、県も建造物指定を進めており、「歴史的なもの」に対する行政の評価が進んだといえよう。調査報告書[6]は「佐原の町の歴史にとって重要な要素は(中略)商業活動の場である町並および河岸」であり、それらが「江戸

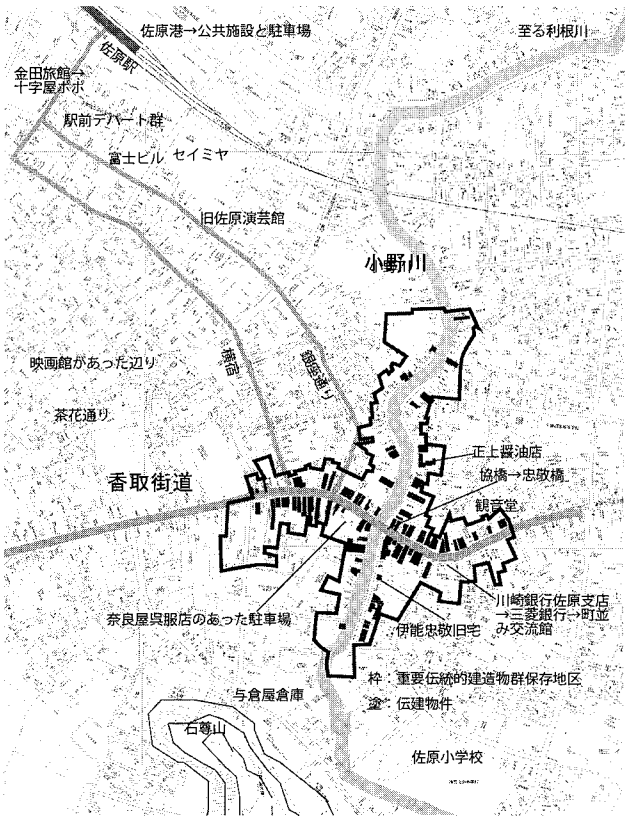

図1 佐原の概要図(1:10000)

時代から昭和前期までの長い期間にわたって、佐原の商業活動を物語る種々の建造物が調和して景観を構成する点」に価値があるとしている。加えて「小野川両岸の自然石の護岸用石垣、および荷揚用階段」(小舟の着岸場所と石段のことを佐原では「だし」と呼ぶ)も歴史的に重要なものであるが「橋梁はすべて近代的な構造のものに改築されており、町並保存の対象に含まれない」としている。材料がオリジナルであることに価値を見出す従来の文化財評価が踏襲されている。

1970年代半ばの時点では、町並み保存への地域住民の合意は得られず、伝建地区指定には至らなかった。小野川を埋めて駐車場にすべきという意見もあった。「歴史的なもの」の価値は、行政や専門家の間では評価されたが、居住環境として認識している地域住民には認められていなかった。

その後、文化財指定が再び勢いを得るのは1990年代になってからだ。90年代前半に歴史的建造物の県指定が相次ぎ、1996年に伝建の指定と重要伝統的建造物群保存地区の選定に至っていることが読み取れる。

表1 佐原の歴史的な町並みにおける文化財一覧

名称	文化財種類	指定	
伊能忠敬旧宅	国・史跡	1930	
正文堂書店店舗	県・建造物	1974	明治 13(1880)年切妻平入土蔵造り、震災被害を修理
小堀屋本店店舗	県・建造物	1974	明治23(1890)年築造、そば屋は天明 2(1782)年創業。
三菱銀行佐原支店旧本館	県・建造物	1992	大正 3(1914)年。現在「町並み交流館」。
福新呉服店店舗兼住宅・土蔵	県・建造物	1992	店舗明治 28(1895)年土蔵明治元(1868)年

			創業文化元(1804)年
中村屋乾物店 店舗・文庫蔵	県・建造物	1992	明治25(1892)年、大火直後。壁厚一尺五寸、二階窓が観音開きの土戸等の最高技術の防火構造。
正上醤油店 店舗・土蔵	県・建造物	1992	店舗天保 3(1832)年土蔵明治元(1868)年 創業寛政 12(1800)年 鎧戸や周り桟等のディティールも残る。
旧油惣商店 店舗・土蔵	県・建造物	1993	店舗明治 33(1900)年 土蔵寛政 10(1798)年 創業寛政 6(1794)年 現在もラー油等が土産
中村屋商店 店舗兼住宅・土蔵	県・建造物	1993	店舗安政 2(1855)年土蔵明治 25(1892)年以降、創業明治 7(1875)年頃。角地で五角柱。
香取市佐原伝統的建造物群保存地区	国・重要伝統的建造物群保存地区	1996	
佐原の山車行事	国・無形民俗	2004	
利根川下流域の漁撈用具	県・有形民俗	2007	県立大利根分館所蔵
伊能忠敬関係資料	国・歴史資料	2010	国宝

※近代化遺産として国重要文化財である横利根閘門等もある。

2-2. 佐原における「歴史的なもの」

市史をはじめとする文献[6-13]によれば、佐原の歴史は以下に要約できる。

古来より佐原は豊かな水利によって自ずと発展した。近世以降は地の利も生かして益々富が蓄積し地域の拠点となっていった[注5]。

昭和初期までは、そのような物資の集散地としての性格が継承された。建造物も優れたものが建った。水質は部分的に悪いところもあったが概して利水には優れていた。しかし治水は困難なままだった。観光価値は、水郷という自然に特化していた[注6]。

昭和中期以降になると、流通の変化により商業の拠点性を失って行く。歴史的な町並みは更新されるべきものとして捉えられていた。しかしその後、日本全体で町並みが見直されるようになり、町並み保存、町並みや祭りに着目した観光開発、中心市街地活性化など様々な目的をもったまちづくりが交差するようになった[注7]。

佐原の「歴史的なもの」として認められている空間は、小野川と香取街道の交差部を中心として、江戸から昭和初期までの歴史的建造物が多く並ぶ町並みである。伝建という新しい制度制定を契機に、個々の町家が集合して形成されている町並みが賑わいの舞台であったという史実を総体として、町並みを「歴史的なもの」として評価する姿勢が広がっていった。所有者に対する修理への公的補助を支えに次第に町並みの復元が進んできており[注8]、観光や店舗の営業再生にもつながっている。

評価されている佐原の歴史とは、佐原が立地特性を生かして商業町や在郷町として繁栄したことを指している。また、伊能忠敬を排出した時代を中心にしてその影響が続いた昭和初期までが評価の対象であり、それ以降現在に至るまでは入っていない。

3. 佐原における「記憶の枠組み」

3-1. 個人の記憶の収集

佐原のまちの記憶について、地域住民18名の方を対象にしてインタビューした。数時間に及んだものも多いが、数度に分けて行った場合もある。年齢構成は、90歳代1名、80歳代5名、70歳代6名、60歳代4名、50歳代1名、40歳代1名である。元市長として町並み保存の画期を支えた方、佐原で生まれ育ち商売を続けてきた老舗店主の方々、小野川沿いに永らく住んできた方々、伝建内や景観条例地区内に自宅や店舗を所有し修理を行っている方々、NPO法人となった「考える会」の方々や女性の会（おかみさん会）に関わっている方等である。これらの方々は、近年の佐原におけるまちづくりを積極的に行っている、もしくは行ってきた方である。

インタビューは2008年11月、2012年5～10月に行った。

インタビューの方法としては、調査する側は一名から数名で、調査対象者は基本的に一人とした。調査する側からは多くを語らず、昔の佐原はどのようなところだったのか、どのような生活だったのかを教えていただくよう依頼して自由に話していただいた。語られることが調査の対象なので、内容の限定や誘導は避けた。

話していただいた内容は、現在のまちに対する意見やまちづくりへの示唆も含まれたがその部分は、今回の分析対象からは削除し、記憶の対象となった空間要素によって整理した（概要は**表 2**）。そこから得られる記憶の特徴を、「歴史的なもの」に直接関連するものとそうでないものという順番で抽出し考察した（3-2）。それらの空間要素の形態と利用の特性を類型化して(3-3)、整理した(**図 3**)。

3-2. 「歴史的なもの」との関係から捉える佐原の記憶の特徴

(1)在郷町としての記憶

記憶によって生活や生業の範囲についての認識が理解できる。

南部の石尊山は散歩や子供時代の遊び場として記憶されている。今の子供たちも、頻度は非常に落ちたとはいえ、訪れることもある遊び場である。

佐原小学校は、地域一帯の皆が通っていたことが、世代を超えて同じ記憶として語られた。事実とも合致する。高齢者は町中にお住まいの方が多く、学校帰りの遊びの記憶も石尊山や小野川などにおけるものだったが、40歳代の方は地域毎にグループで下校しており、帰宅したあとはその地域に住む近くの友人らと良く遊んだという記憶を持つ方がいた。

一方で、北側の水郷地帯が働く場だったという記憶は、現在では佐原と水郷地帯との関係が弱まっているという認識と共に語られた。生業に関連した記憶には、佐原を中心として東京から茨城に至る広範囲にわたる具体的な地名への言及があった。

佐原が在郷町として当該地域生活の中心にあったという記憶は、生活の面でも生業の面でも共有されているといえる[注9]。

90歳代の方から、石尊山での遊びとは「おなかが空いて（食べ物を）狙いに行く」ことだったという記憶が語られた。併せて果実などの名前が季節毎に多く挙げられた（ヤマイジモ、椎の実、桑の実、アケビ、柿、枇杷等）。

重伝建の価値として認められている昭和半ばまでの歴史を生活体験として記銘した記憶を語る世代は、60歳代後半以降の高齢者に限られる。交通機関や特定の施設についての記憶は、物や空間としてなくなってしまうと、次の世代がその記憶を想起することは困難になる。ただし港や水路などがあった場所には、わずかな段差や蓋、細い路地等の形跡が残っている場合もある。奈良屋デパートはまちの真ん中に位置していたが、今は跡地が駐車場となっている。そこは、アスファルト舗装ではなく砂利敷きのオープンスペースであり、

祭りの日には屋台広場になって賑わいの中心になるという使われ方をしている。奈良屋デパートがあった時代の賑わいを体験として記銘していない方でも、奈良屋デパートの記憶を情報として知ったうえで祭りの風景に接すれば、想像によって過去の記憶が記銘され、共有され得る。こうした記憶の継承が実際に生じていることはインタビューによってわかったが、多くの他の跡地ではそうではない。

(2)商家町としての記憶

香取街道沿いに店舗が建ち並び非常に賑わっていたという記憶は、現存しない店舗も含めて具体的な店名や詳細な活動風景を中心にして、こうした状況が江戸時代より続いてきたという歴史的な事実に対する認識や説明と共に語られた。江戸時代の情景が、昭和半ばの記憶から連続的につながって連想されているといえる。その後、佐原の賑わいは、小野川と香取街道の交差しているあたりから、横宿、駅前へと移動し、さらに現在はロードサイドへと移ったが、そのような実際の変化は、語られた記憶の中にも追うことができる。

町並みを構成している町家は、重伝建の伝統的建造物として保存対象の指定を受けており、公的な助成も含めて修理されて、新たな利用が為されているものも多い。これらは観光客も立ち寄るレストラン等として活用されているが、地域住民も利用している。しかし、地域住民から記憶として言及された町家や店名はなかった。

(3)小野川の重要性や関心の高さ

小野川は、佐原の繁栄という歴史をもたらした「歴史的なもの」の源泉である。小野川が生業と生活の中心であった状態は、昭和30年代頃までは続いていた。その後、水質が悪化し、「だし」が取り壊されていった。その小野川に対する記憶は、内容も時期も広範囲で詳細に及ぶ。記憶の最も豊かな場所だといえるだろう。

小野川で荷揚などの生業をしていた世代の方は、既にお亡くなりになっている方がほとんどで、仕事場の状況に関する詳細な内容を、実際に働いていた方の記憶として得ることは困難になっている。当時子供だった方の記憶として、働いている大人との関係が語られた。水の中で遊んでいると働いている大人の邪魔になることがあり、注意を受けたが、基本的には寛容に見守られていたという。

60歳代以上の方の中には、小野川の水の中に入って遊んだという体験によって記銘された記憶を持つ方々も多い。50歳代以下はせいぜい釣りをした程度の記憶であり、世代によって内容が異なる。

一時期は今よりも水質がずっと悪かったが、近年では清掃活動なども行われている。それでも、自分の子供時代の記憶と平行して、水質改善をすべきだという意見を述べる人が複数いた。濁度が低いだけで水質は良好であるという事実はあるが、記憶としては「水底まで見えてきれいだった」ことが強調された。

「小野川を埋めようという話もあった」というエピソードが語られるときは、「そのようなことはやるべきではない」「今、目の前にある小野川はあって当たり前」という思いも述べられた。埋立のような急激な変化は結局起こらなかったものの、小野川が次第に佐原の日常生活から離れていく変容過程を残念な思いで捉えていた方もいたことがわかった。

小野川に関する記憶として特筆すべきは、水がきれいに保たれていた理由（洗剤が使われていなかった、工場がなかった、ゴミといってもビニール袋や空き缶ではなく埃のようなものしかなかった等）やだしの管理（個人がだしを所有していた、だしを新たに造るためには県の許可が必要だった、県に占用料のようなものを払っていた、各商家が小野川沿いに自分の蔵を構えてその前にだしをつくっていた等）についての認識が語られることが多いという点である。以前はうまく機能していたものが機能しなくなった現況を、地域の生活における原因と関連づけて理解し、他人に説明するときに記憶として語っているといえよう。

生業についても、なぜ佐原が栄えたのか（利根川の支流の小野川を中心として発展した等）、そしてそれがなぜだめになったのか（物流が変わったこと、地の利を生かした発展だったので物流が悪くなったら中心性を失うのは当然等）、という理由も含めて記憶を語る方が多かった。これらの理由が事実であるか否かは検証のしようもなく、いつの時点でそれぞれの方がそのような理由を考えるようになったのかは明らかにできていないが、衰退していく佐原の中心部や汚れていく小野川を目の前にして、主体的な関心を持ちながら生活していたこと、同時に何もできなかった無力感が伺える。

(4)「歴史的なもの」と記憶の関係

このように記憶は、「歴史的なもの」の源泉である在郷町や商家町という側面に大きく左右された。また周辺の農業が衰退し、農産物の集積／集散地としての位置づけは失われたが、観光という新たな産業によって商家町としての賑わいは継続されているといえる。

小野川のように、物理的に残存しているとそれへの記憶を通じて、地域の大きな思想の流れも追うことができる。

3-3. 記憶に関する空間要素の四つの状態

以上をふまえると記憶に大きく影響するものとして、残存するものの他に、「歴史的なもの」である在郷町や商家町という歴史の産業や活動という利用状況とその変容が挙げられることがわかる。

そこで、形態の残存状況と、利用の継承度合いという二軸で、記憶に関する空間要素を検討する。形態も利用もどちらもが消失している「消失」、形態は残っていても利用は変容した「形態残存」、利用は残っているが形態のみ消失した「利用継承」、形態も残存し利用も継承されており記憶と現状が同じである「一致」という四つの状態に分類できる。縦軸は利用継承度、横軸は形態残存度とする（図2、表3参照）。それぞれについての記憶のあり方を考察する。

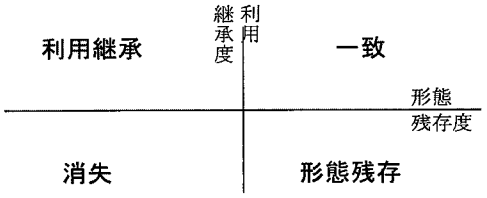

図2　記憶に関する空間要素の分類

(1) 消失

空間の形態も利用も消失しているにも関わらず、記憶が語られたものには、生業や賑わいに関するもの、大規模な空間の改変を実現させた公共事業などがある。

土地の生産性に依拠していた昭和半ばまでの生活や生業に関する非常に詳細な記憶は、当時の風景がどのように現出していたかというメカニズムについての希少で貴重な情報でもあり、記録として残すことがまず重要である。また、想起された記憶を基に改めて現地調査をすれば、消失したと捉えていたものが、既述の奈良屋デパート跡地の砂利のように、わずかな痕跡として残っている場合もある。

表2　佐原において語られた個人の記憶(抜粋)

- 佐原のまち全体：「佐原は香取街道と小野川沿いという十字の軸に沿って発展したまちです。小野川沿いの道は、河岸通りと呼ばれました。小野川沿いには、舟運により栄えた卸しのお店が、香取街道沿いには荒物屋、本屋、呉服屋など生活に根付いたお店が多く立地していました。元々競争が激しく入れ替わりも多い佐原ですが、戦後以降、経済の仕組みが変わり、多くの卸売り店は店を閉じてしまいました。」「佐原に来れば何でも揃う、と茨城から歩いて買い物に来る人もいた。」「自動車が普及する前はよく駅前で買い物をしていた。」「佐原も農家の受け入れ態勢ができていた。」「昭和20年、14,15歳のとき、今度うちを壊すからと言われた。佐原にゴタク部隊という軍隊がいた。昭和21年3月に米軍が鹿島灘に上陸するからここで決戦になるという話になった。戦車が入るから、小野川の左右を利根川の河口まで20m下げろと昭和20年5月に命令が来た。うちは手があったから早く壊してしまった。立派な家が一杯あった。今ある家は国に背いたから残っている。それで終戦がきた。終戦の次の年、壊し賃1500円をもらいに行った。結構何軒か壊した。ここは元に戻した。」「佐原では江戸から持って来た方が良く売れた。」「佐原に来てもう40年。来た頃とは生活スタイルが全然違う。薪を燃やしてご飯を炊いていた。近隣でも少なかったが、(材木屋だったから)薪がいっぱい出る。土で作ったお釜があって。昔は煙を出して暖炉をとっていたから鴨居が煤で真っ黒。お風呂もつい最近まで薪で焚いていた。入り心地は良かった。時間かけて燃やした分だけ、柔らかくてさめにくい。利点も一杯あるが、昔の生活は何でも手間がかかる。」「住み込みの人が10人以上いた。」
- 佐原港（取壊）：「わずか20年で閉じてしまった港。当時、周り一帯は何も無く、野っ原と田んぼが広がっていました。」「佐原港の河原に力士を呼んで相撲で人を集めていた。学校の帰りは友達と河原に座って石を投げながら電車を待ったりしていた。」
- 駅前デパート（建物のみ一部残存）：「佐原の駅前といえば、3つのデパートが競合する繁華街でした。十字屋ポポ、富士ビル、セイミヤ。一番最初にできた富士ビルの屋上は小さな遊園地のようになっていて、そこに連れて行ってもらうのが当時の子供たちにとって、日曜日のおでかけの楽しみでした。」「富士ビルの屋上の遊園地に行くのが楽しみでした。」「富士ビルが一番最初のデパート。富士ビルには屋上に子供たちが遊ぶ遊園地があって食堂もあった。お子様ランチはそこで食べたのがはじめて。」
- 旅館（残存しているものもあり）：「佐原にはたくさんの旅館がありました。ほとんどが佐原にきた商人が泊まっていく商人宿です。中でも、利根川沿いにある川岸屋、旧役所の近くの木内旅館、駅前の金田旅館はとても大きく、佐原の人達も宴会などで利用していました。川岸屋では、佐原の旦那衆が集まり、大祭の話し合いが行われていました。」
- 香取街道：「私が子供の頃なんかは、香取街道を牛が歩いていましたね。」
- 忠敬橋、小野川と香取街道の交差部：「ここに昔、交番と公衆便所があったことは非常に大切。そういういわれが大切。」「公衆便所は地元の人達が協力してつくった。」
- 奈良屋デパート（取壊）：「奈良屋呉服店は京都に本店がある大きな呉服屋さんです。茨城からも奈良屋に人がやってきました。屋上からは佐原のまちが見渡せてね、こどもたちがよく登っていましたよ。」
- 横宿通り：「昭和の中頃だったらね、横宿のあたりが一番賑わってたね。この辺(横宿と香取街道の交差部)はすごい人手で、小学生の頃は歩くのも大変だったよ。」「食べ物や生活用品、本屋さんなど、そういった商品は香取街道沿いにあった。横宿通りや信用金庫から入ってきた道がいちばん賑やかだった。
- 銀座通り：「昭和3、40年代にはとても賑わった通りで、仮装パレードが開かれたりもしてました。」
- 茶花通り：「呑み屋さんで賑わっていた路地です。」「下仲町と浜宿の境に花柳界があり、呑み屋があった。」「茶花通りには元々旅籠が並んでいた。」
- 佐原演芸館（建物は残存）：「いわゆるストリップ劇場ですね。成田からもお客がやってきていたよ。」「佐原演芸館があったところは旅芸人が宿泊するところもあった。」
- 三つの映画館（取壊）：「昭和の初め頃には佐原には三つの映画館がありました。オデオン座、サカモト座、松川屋です。それも、各映画館の間の距離は200m足らず、、、そんな狭い範囲に三つも映画館があるくらい、とても賑わったまちでした。」
- 観音堂：「下仲道の観音堂には、集会所と近くに有った観音様を祀る場所を兼ねています。昭和の中頃までは、独り者の男を数年毎に交替して住まわせて、管理かなんかをやってもらっていたなあ。」「初午祭りとは、年に一度二月頃に行われるお稲荷さんのお祭りです。主役は近所の子供たち。下仲町では、裁判所前の道にお祭りの舞台となる小さな小屋を建てました。初午祭りになると、子供たちが旗を売って歩くんだよ。100円くらいだっけな。昭和20年より前の話だな。」
- 正上醤油製造所（現役）：「この道も含めて全部正上さんの工場だったよ。」
- 柏屋もなか店（現役）：「昭和の初めにオープンしたもなか屋さんは、いつも行列を作っていました。」
- 小野川：「小野川は、昭和10年頃、まだ水がきれいで、水晶みたいな水だった。子供なんかが水泳できた。小学校4年の頃の記憶がある。」「うちの親父も泳いだっていっていた。」「この上に小学校があるが、川をみると魚が泳いでいて、鮒とか。学校行くのに時間がかかる。今、川をのぞく子供はいない。何も動いていない。わからないから。」「大雨で小野川が溢れかえったりもありましたね。水門ができてからそういうことはなくなりました。」「JR(当時の国鉄)の線路より北側には、昔は田んぼが大きく広がっていました。家が建ってたのは小野川沿いとか、、、部分的でしたね。」「よく川で泳いで遊んでいたよ。」「小野川で洗濯をしている人もいました。小野川で洗濯をするのは川沿いの人です。」「子供の頃は石ころとかで川を堰き止めてしてね、それで魚を獲ったり。あと川蟹なんかもいましたね。網で獲っていました。」「蜆や蟹を獲って遊んでいた。川は危ないからと泳ぐのは禁止されていたが遊んでいた。その頃は今よりも水が豊富だったが藻で底は見えなかった。」「上に工場ができちゃってからね。」「生活が変わっちゃたでしょ。昔も履き掃除をしたゴミは小野川に流しちゃったけれど、特に汚れなかった。今のゴミは違うから。」「小野川沿いには材木屋がたくさんありました。」「材木は家の前に立てかけていた、北佐原から材木を船で買いに来ていた。それで商売繁盛していた。」「小野川沿いに材木屋があるのはまちが繁盛すると多くの材木が必要になるから。茨城南部、千葉北部は材木になる木が一本もない。金持ちは東京から、その他は筑波山の向こうから土浦まで持ってきてそこから船で来た。」「水田から収穫した米のうち納める分は各家の前の川沿いに山のように積み上げられた。お百姓さんがいくらの割合を納めるかは決まっていたから、この山の大きさがそのまま財産のインディケーターになった。昭和の初期はまだ行われていた。」「東京から釣りの会の人も来ていました。」「現在、眼医になっているところもこの当時は材木屋さんだった。」「小野川沿いがメインストリートで、川沿いはほぼ卸し問屋だった。」「みんなゴミを川に投げ捨ててた。ゴミが浮いて流れてた。」「みんなが力を合わせて佐原は恩恵があった。堰き止めるところは、栗山と小野川をつなげる話があった。川を反対に流そうと。本川岸の中でも、昔の人の考えと、今の人の考え方は違う。」「小野川を埋めちゃえとは思ってなかった。子供の頃の、川で泳いだとかの印象は一生忘れない。」「小野川を埋めてしまえという発想が強かったのは、小野川沿いの人というよりは、街道沿いの人たち。小売業だから駐車場があれば買い物に来てくれるという考え。」「埋め立てて駐車場にしちゃえというのは昭和50年代。」「埋めるというより塞ぐ。」「すずめ焼き屋のおじいさんが、小さい舟で、ビンズっていう団子になってて米ぬかみたいなのを入れて、小さいタナゴがいっぱい入って、そりゃきれいな水だった。」「(昔はガードレールがなかったので)ずいぶん落っこちた。自転車で落っこちたりした。ちんどん屋追いかけて落ちた。でも助けたことも何度もある。表彰された。人命救助で。」「川で育つと落ちたときはお互い様。落ちたぞーと言う。」「小野川には決め事があった。井上さんのところは公共のだし、遺体を上げるのは山野病院の前、投網は何時から何時まで、大きい網は何時から何時まで。」「鯉、鮒、タナゴ、メダカ、川蟹、ナマズ、エビ。伊能忠敬の家の前に一杯いた。学校の帰りに良く獲っていた。あとはウナギ。今もいる。泳いだりもした。橋の欄干から大水のとき、飛び込んだりもした。大水のときは小野川を閉めてしまう。利根川が満水だから。その時は流れがなくなる。」「水が少なくなった。もっと深かった。普通で腰くらい。茨城県の方から来られない。大水のときは家の裏の方まで水が来ていた。今で言う高校の頃は、シマの人達が来ていた。」「明治41,42年の大水の時は、舟をこいでカドヤ(信用金庫)のところまで行けたと言っていた。」「小野川は佐原のルーツ。そんなことは分かっている。自分たちのじいさんたちが何を思ってここで開業をして、何を思って商売をしていたか、すべてが川だろうと。でもあのどぶをどうするか。そばに行くだけでいやだった。でも小さい頃はあの川で魚を獲っていた。30年の間でどぶ川になった。生活雑排水のせい。洗剤やら色々生活が変わってしまったから。そのうち浄化槽の義務づけで、流れなくなる。どぶの中の栄養が昔と全然違う。洗剤なんて昔はなかったわけ。」「昔、ジャージャー橋の灯篭が立っているところに立派な木があった。その下で釣りをしていた。」
- だし（一部残存）：「うちの(だしは公共のだしだったので)こう（川と平行の向きで付いていた）だった。」「これはただのだしだから、色んな人が舟を着けていた。着けて、ここから色んな物の積み降ろしをやっていた。こういう風に無料でやってくれるのと、自分で作った人と、ふたつあった。」「だしは河川占用料を個人で県に払っていた」「占用料が大した値段じゃなかったから、皆残していた。」「小野川で亡くなる人がいると、上げるだしが決まっている。山野病院の前。他のだしからは上げられない。井上さんの前のだしは公共のだし。他のところより倍長い。」「舟の先頭に紋付を着た部落の役員の人が陶枕を持って、2,3叟で来ていた。」「今から15年くらい前に材木屋は辞めてしまった。材木屋はなくなると言われていた。その20年くらい前から。うちは一番早く辞めてしまった。」「この辺りで材木屋は8軒。昔は儲かった。材木屋がなくなるというのは、大手が出て来たから。建設会社が。昔は建設会社の下請けをやって、成田まで行ったこともある。終戦から（昭和）35年位までは川から直接木を上げることをやっていた。小野川はその頃までそういう商売になっていた。当時は舟を使っているのがまだ一杯いた。まだ車がなかったから。車を持っているのはプロでやっている人だけ。私らはリアカーで持って行った。その頃、警察がこの家は許可されてやっているのか、金をそう動かしているのか、調べにきた。戦後間もなく。終戦、お金があっても使って良い額が決まっていた。みんな配給だった。小野川はそういうのに利用されていた。」「便利屋さんというのがいた。舟の便利屋。本川岸には金物屋、雑貨屋、あらゆる商店が40軒近くあった。シマにはあまり店が無いから舟で来て、買い物をしなければならなかった。そういうのを便利屋に頼んでいた。そういう人達は井上さんの前のだしに着けていた。どこの部落にも便利屋という商売があった。相当な出入りがあった。佐原でも東京までの便利屋もあった。」「大正の頃はみんな木のだしだったが、昭和の頃になると、みんな力をつけてコンクリートの良いだしになっていった。」
- 橋（建替え）：「今の共栄橋は、昔は小倉橋と呼ばれていました。材木屋を営む小倉さんが橋の向こうの店舗と材木置き場を結ぶために架けた私有の橋だからです。」
- さっぱ舟（消失）：「うちは問屋をやっていたから、さっぱ舟に西瓜やら茄子、胡瓜を山にしていたのが今でも目に焼き付いている。」「利根川の向こう側はずずぶな川を埋め立てて作った『スプール』だった。みんなそこからさっぱ舟に乗って佐原に買いに来ていた。なんでもかんでもさっぱ舟は使っていた。こういうのがなくなったのは終戦後十年位。」
- 小野川の向こう：「うちは、おじいさんが向津生まれで次男坊だった。佐原の方へ明治のはじめころ移住した。小野川の向こうはお米の産地で、青物がすごかった。瓜、西瓜、ネギ、あらゆるものがすごかった。土壌が良かった。みんな佐原にもってきていた。青物に目をつけた祖父が、問屋をはじめた。ともかく小野川はすごくて、みんな川から舟であげた。昔は養蚕も盛んだった。」「佐原のすぐ背景にある高台になったところは、農家がいっぱいあって、養蚕をやっていた。よく養蚕場って言われる建物が大きい敷地の中にあった。」
- 与倉屋（建物は残存）：「与倉屋さんのあたりが小野川の終着点という感じでしたね。船もみんな与倉屋さんあたりで引き返していました。」
- 石尊山：「放課後は、石尊山なんかで遊ぶこともありましたね。ぱちんこ遊びなど町中ではできない遊びをしてました。」
- オート三輪車（消失）：「昭和20年頃は皆オート三輪を使ってましたよ。オート三輪「みずしま」が人気で、、、私も欲しかったなあ。」
- 観光船さつき丸（消失）：「200～300人くらい乗ることができる水郷汽船の船が小野川河口に着けられていた。」「ここらの修学旅行はみんなその船にのって銚子まで行った。」
- 利根川：「投網を家の前に干していたんです。舟で投網もって利根川の方に行って趣味で魚を獲っていたので」「佐原の蜆は小さかったが、笹川(佐原より利根川の下流)から農家が舟で蜆を売りに来ていた。笹川まで下ると潮がさしておいしくなったらしい。」「よく言うのは、笹川の、小見川のもっと向こうの土地の汐留水門ってのが出来て小野川の魚が減ったて言いますね。」「もし利根川の堤防が切れた場合には、法界寺のところまで利根川の水がいったというたとえがある。昔は堤防が低かった。」「牛堀のところの大きな橋は、秋になると下りウナギがたくさんいて、網を張って獲る。」「川の水を使って火事を消していた。」
- ダイボシ醤油（建物は一部残存）：「ダイボシの角」という言い方は今でも通じます。」
- 今は裁判所となった寺（建替え）：「この辺りは全部お墓だったな、、、」
- 井戸：「飲み水は井戸を掘ってもうちまでで終わり。あとみんな真っ赤な水。飲めない。利根川までみんな渋。水は砂の層がないと澄まないから、うちから先はみんな渋水で飲み水になんない。下川岸なんかでは明治時代から竹筒を並べて簡易水道みたいのを作って水を飲んでたと、祖父に聞いた。」「水では佐原はだいぶ苦労した。川沿いの人は、みんな苦労してた。ひどいところは、小野川の水を汲んでお風呂にしてた。」
- 交通道路：「最初に佐原から牛堀まで舗装になったときはうれしかった。砂利道ばっかりだったから。茨城に工業団地をつくったり、橋本さん（という代議士）はすごかった。」

（かっこ内は現状についての補足説明、対象別整理：インタビュー内容から抜粋、まちづくりや町並み保存運動などに対する想いや意見などは全て省略）

また、関連する空間要素がなくなっていても、インタビュー等を契機に、元々記銘された記憶を持っていた方の想起が生じたり、その記憶を他人が共有することが起こった。しかし、新たな記銘が自然に起きることは想定しにくく、記銘もしくは想起された記憶の保持は非常に困難であるといえる。

現在の暮らし方になる以前の状況は「歴史的なもの」が多いが、それを記憶として語ることができる世代は、既にかなり高齢化しており緊急を要する。形態や利用が消失したものの記憶を継承するためには、これまでの文化財施策だけでは対応できない。

また「歴史的なもの」とも認識されていない戦後の暮らしについての記憶も語られた。

(2)形態残存

修理によって建造物保存をしたあとに、全く異なる利用が為されている町家利用のレストランを対象とする地域住民の記憶は、今回のインタビュー調査においては全く聴かれなかった。実際には観光客と地域住民の双方が使っている店舗も少なくなく、今後の記憶がどのように記銘されるか注目される[注10)]。

一方で、廃墟になっている駅前デパート群の記憶は語られた。駅前デパート群は三棟が二つの塊として建っていたが、それらの間は約70mぐらい離れて対面しており、直線道路で結ばれているので、囲まれ感が生じていた。休日にはこの70mの区間が人で埋め尽くされたという記憶も語られた。

賑わいは、それが時代を経て移動していった時間軸を含む記憶として語られることが多かった。歴史的な町並みにおける直接的な体験として記銘された記憶はもっていなくても、町並み保存によって形態残存している町並みに触れたとき、賑わっていたであろう風景を容易に想像できる。そのため、自分の記憶にある駅前の賑わいの姿から、さらに以前の姿を連続的に想起することが容易に可能だからだといえよう。また、そのようにいったん想起された記憶は、町並みが保存されていると保持されやすいといえよう。

小野川については、埋めてしまって駐車場にしてしまえという主張が一時期の一部住民からはあった、という記憶は、眼前の小野川を守ったという自負と共に語られた。

(3)利用継承

産業の構造転換や、利便性が飛躍的に増した生活様式の変化によって、昭和半ばから継承されている利用は、祭りや子供の遊び、観光等に限定され、地域住民の日常生活との関連は薄い。

ある老舗和菓子屋は、店構えは新しくしたものの売っている特定の和菓子を変えていない。記憶と事実の両方で、佐原の代表的なお土産としての地位は、確立され、世代を超えて共有されている。

まちなかの肥料問屋は、自分の父親の世代から続く記憶として、周辺の農村に肥料を運び農作物と交換してきたことを語った。以前は自動三輪車等だったが最近は軽トラックを使っているという。

継承されている利用は、いずれも「歴史的なもの」に由来しているが従来の文化財のカテゴリーでは対応できていない。

(4)一致

インタビューの結果、佐原小学校と石尊山は、形態も残存しており、記憶の中の利用や景観は、現況とあまり変わらない[注11)]。

石尊山の斜面緑地は風致地区として指定されており、風景に対する公的な評価を既に受けたものといえる。まちの中心に位置する、小野川と香取街道が交差する点から、その風景は非常に良く望見できる（**写真1**参照）。この風景は、外観が良好というだけではなく、変容せずに存在してきたものであり地域住民が共有の記憶を保持する装置として機能していたといえる。

表3　記憶に関する空間要素の四つの状態

<table>
<tr><td></td><td><u>消失</u>
形態も利用も既に失われている空間</td><td colspan="2"><u>形態残存</u>
形態は残存しているが記憶されている利用はなくなっている空間</td><td colspan="2"><u>利用継承</u>
記憶されている利用は継承されているが、形態は変容した空間</td><td><u>一致</u>
形態も利用も記憶されている状態のまま(に近い)である空間</td></tr>
<tr><td>具体事例</td><td>オート三輪車
さっぱ舟
奈良屋デパート
映画館
佐原港
水害（の形跡）</td><td colspan="2">駅前デパート
観音堂
修理済み伝建物
井戸
横宿、茶花通り、銀座通り
利根川</td><td>町並み
小野川
だし</td><td>橋
もなか柏屋</td><td>（祭りの場となる町並み）
佐原小学校
石尊山</td></tr>
<tr><td rowspan="2">記憶の内容の特徴</td><td rowspan="2">・動産や点としての建築物等が多い
・生業に関するものが多い</td><td colspan="5">・町並みでは、形態や利用がそれぞれ限定的に残存／継承されているが、祭りのような非日常時においては記憶のままの風景が生じる。
・小野川には、だしや橋のように水が流れるという同じ機能は担保しているが形態は変容した要素や、自然石護岸のように物そのものは修理されたが残存している要素、常に流れる水は水質の変化は多くの人が認知しているなど、多様な特質がある</td></tr>
<tr><td colspan="2">・廃墟となった駅前デパートなどの記憶は豊か
・町並みでの記憶はあまり語られない</td><td colspan="2">・生業としての利用はなくなりがちで、子供の遊び等の利用は継承されやすい
・老舗の一品は、手土産等として継承され得る</td><td>・石尊山は、自然に近い状態のままであり、子供の遊び場としての利用は減少しているが、風景としてはあまり変わらない</td></tr>
</table>

※佐原の大祭は、小野川左岸の本宿地区の夏祭りと右岸新宿地区の秋祭りがある。町毎に佐原囃子と共に山車を曳き回して町中が盛り上がるために歩道橋を撤去するなど、町並みを整えた経緯もある。一年の他の日がすべて祭りのためという住民も少なくない。国の無形民俗文化財に指定されている。大勢の観光客も来て、大変盛り上がる。そのために戻ってくる若者も多い。佐原にとって祭りは多様な意味で重要である。しかし日常生活における空間要素から想起される記憶というよりは、非日常な二日を過ごす時間として認識されていると考えられ、本論文では対象とはしない。

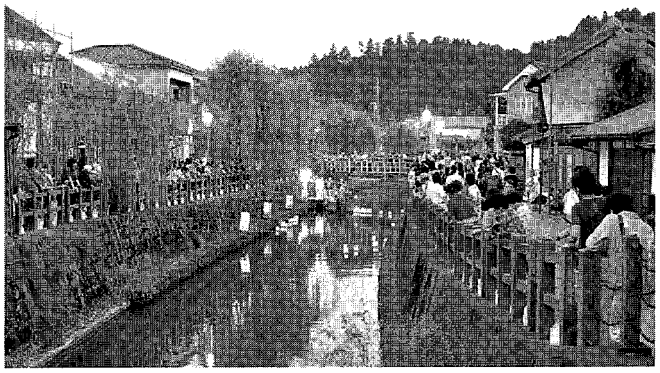

写真 1　小野川と香取街道交差部からみた石尊山

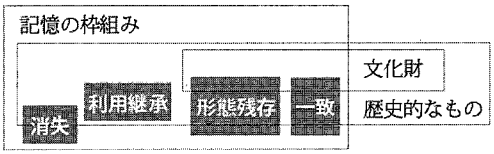

図 3　記憶の枠組みの位置づけ

3-4.　佐原における集合的記憶

(1)他人の記憶に影響を受けた個人の記憶とその共有

個別に収集した個人の記憶を、広く共有することを目的に「さわら昭和の記憶とくらし展」を 2012 年 10 月 12～14 日の三日間にわたって、筆者が所属する研究室主宰で開催した。会場は歴史的な町並みに位置する和菓子屋の蔵を借用した。来場者は約 380 人だった。展示の内容は、以下の六つのパートで構成して、大きくカラープリントに打ち出してパネルにした（表 4）。

表 4　個人の記憶を共有することを目的とした展示内容

1)歴史年表
史実を整理した年表。古写真も組み込んで、概略が簡潔に理解できるように配慮した。本論文では「歴史的なもの」と整理できる。

2)聞き書き地図
既に収集していた個人の記憶を地図に落としたもの。記憶が語られた建築物は外形がわかるように色塗りをしたり、言葉を吹き出しで添えたり、古写真を使う等して、佐原における個人の記憶が理解しやすいように工夫した。

3)建物利用の変遷
住宅地図をベースにして 1970 年代、80 年代、90 年代、2000 年代の四時点における個別商店の変遷を地図にしたものに、個人の記憶で語られた賑わいの様子や当時の人口データ、古写真等も添えた。

4)小野川の変遷
昭和 5 年に描かれた小野川の鳥瞰図、1971 年の住宅地図、現在の住宅地図を並べて、その時の古写真などによって小野川沿いの風景や使い方が理解できるようにした。

5)提案パネル
佐原の今後のまちづくりを研究室メンバーから提案した。よって、本論文とは直接のつながりはない。

6)古写真のスライド上映
既述の 1～4) までのパート展示で使った古写真をスライドショーとしたもの。主な目的は、座る場所を一緒に用意して、一息いれていただくもので、本論文との直接的なつながりはない。

上記の 2～4) のパートを中心に、来場者の中から、佐原の住民もしくは元住民の方、約 10 名を対象に、基本的に調査者と一対一でインタビューを行い、佐原における暮らしの記憶を語っていただいた。個人の記憶を収集したときとの違いは、収集済みの記憶をとりまとめた展示を前にしてインタビューをしている点である。

まず 2) 聞き書き地図として整理された内容について整理する。個人の記憶として語られたが既に消失したところで、たとえば映画館群があったエリアは行った経験のある人がいなかった。その場合は想像もできず、記憶の記銘は起こらなかった。一方で、現在は消失していても行った経験があり具体的な空間の有り様がわかる場合は、過去の利用実態の事実が、驚きをもって受けとめられることがあった。具体例としては、駅北口の広い駐車場が現在ある理由が、佐原港跡地だったことに納得した様子が見られた。

また 3)建物利用の変遷に関する詳細な情報が提供されると、記憶として想起されることが生じた。具体的には、特定の店の名前に触れることで「あー、ここに確かにこの店があった」というような感想が聴かれた。賑わっていた町並みに家族で買い物に行ったという記憶もその場で盛んに語られた。さらにそのような場に、他の方も参加して、昔はこのような賑わいがあったという記憶が共有されるという現象も起きた。

一方で、4)小野川の変遷については、個人の記憶として語られた内容は情報として既に知っているものの、本人の体験としては為されたことがなかったという状態であった。そのため、今回のサロンの場は、小野川に関する新たな記憶の記銘もしくは想起させる契機としては機能しなかったといえる。

(2) 集合的記憶の創出プロセス

まず公共空間や地域社会を対象にした集合的記憶に関する研究の蓄積を援用して、その創出プロセスを考察する [15-18]。

アルヴァックスの集合的記憶論では、「日常生活のなかでは、私たちは他者とともに出来事を記銘し、他者とともにアクセスできる公共的な手がかりのなかにそれを保持し、そしてそれらの手がかりを用いながら他者とともに再びそれを保持し、そしてそれらの手がかりを用いながら他者とともに再びそれを想起する」ものとして記憶が位置づけられている [15]。そのような集合的記憶の創出プロセスを図 4 に整理した。このプロセスが実現するための「記憶の枠組み」に関して、以下の論点を考察する。

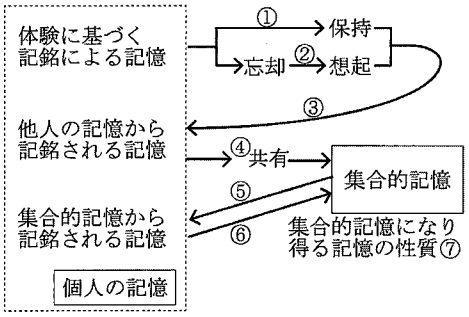

図 4　集合的記憶の創出プロセス

(3) 佐原における集合的記憶の創出プロセス

以上をふまえて、個人の記憶が、集合的記憶になる（記銘保持想起や個人の記憶が共有される）プロセスを考察した。

①個人の記憶の保持

体験に基づく記銘による記憶は、それを保持する空間の形態や利用の継承が途切れても、保持され続け得ることがわかった。ただしそのような記憶は、当人が亡くなれば無くなってしまう。

②忘却した記憶の想起

昔の暮らしの有り様を尋ねられると、忘却されていた記憶が再び想起される契機となることがわかった。

③他人の記憶からの記銘

実際には体験していなくても、他人の記憶を自分の記憶として記銘し得ることがわかった。そのような状況は、オリジナルの記憶が記銘されたときの空間が形態残存すると生じる場合があることがわかった。具体的には、賑わいを想起させる歴史的な町並みや小野川のだし、廃墟となったデパート群とその周辺環境が、例である。

④個人の記憶の共有

個人が持っている記憶が共有されると集合的記憶になる。共有とは、個人の記憶がどのようなものなのかが明示され、それを複数の人間が自分の記憶として記銘することだ。そのためには仲介者が個人の記憶を地図にまとめたり、解説を加えることが有効だ。

⑤⑥⑦集合的記憶と個人の記憶の関係

集合的記憶から個人の記憶が記銘されるときは、他人の記憶の詳細を自分の記憶として記銘するというよりは、集合的記憶を分解せずに佐原というまち全体の変容として理解するということが生じた。

このような一連のプロセスによって創出された佐原における集合的記憶において、「歴史的なもの」といえる商家町であった史実は、町並みから横宿へ、さらに駅前へと移動していった賑わいとして認知された。各々の場所での賑わいの様相に加えて、位置が移動したという大きな流れも集合的記憶として共有された。

かつて清らかな水が流れていた小野川と密な関係を持っていた暮らしの風景は、そもそも集合的記憶になっていたといえる。また、なぜそのような風景が維持されていたのか、同時に、なぜ変容したのか、佐原という地域社会における小野川に対する認識の変化についての背景も共有された。なぜ、そのような共有が生じたかといえば、小野川が現存しているからこそ、記憶を語るにあたっては、小野川に対する認識が変容した理由を他人に説明する必要が生じ、自分なりに論理づけたものだからではないだろうか。

4．「記憶の枠組み」の特徴と意義

4-1. 佐原における記憶の特徴についての考察

最後に、本論文の冒頭に掲げた記憶の二つの特徴、すなわち多義性と現在性をふまえて、佐原における記憶の特徴について整理する。

(1)暮らしの記憶の単一性

佐原における記憶は在郷町としての暮らし方がほとんどで、立場が異なれば記憶も異なるという記憶の多義性は見られなかった。

この点については、近代以前から継承される暮らし方は実際に単一のものであったのか、それとも多様だったが「歴史的なもの」としての保存対象が単一の価値評価であったために多様な部分が忘却されて、今回のインタビューからは記憶として想起されずに語られなかったのか、断定できない。

(2)現在性から育まれる変容への関心

記憶は、ある一時点の風景だけではなく、その前後や背景にあるもの、つまり対象の変化や変容に対する関心を含む。記憶を語るにあたって、なぜあのような状況が生じていたのか、なぜそれが変容したのか、という理由や背景への考察も併せて開示されることがある。環境の維持管理者であったからこその記憶の語り方だといえよう。そのような状況が集合的記憶として明示されることで、環境への主体的な関わりという暮らし方が明らかになる。

記憶は、歴史的な町並み以外の場所や広域的な関係性、昭和初期以降についても語られた。それらは文化財どころか「歴史的なもの」としても認知されていない。記憶によって育まれる過去の変容への関心は、「歴史的なもの」に留まらないことがわかった。

4-2. 「記憶の枠組み」の形態と利用についての考察

記憶と空間の関係は、空間の形態の残存具合と利用の継承状況によって四つに分類すると、以下の知見が得られた。

形態も利用も消失しているにも関わらず、保持されている記憶があるならば、それらを記録する必要がある。

形態は残存しているが従来の利用は失われて新たな利用が行われている単体の建築物については、従来の利用についても新たな利用についても今回の調査では記憶が語られなかった。しかしそれらが集合したといえる町並みは、「歴史的なもの」の源泉である在郷町としての側面が集合的記憶となるプロセスに貢献している。

一見したところ形態は既に残存していないが、利用が継承されていて記憶が語られる場合には、わずかな形態の痕跡や形態に込められた意図を改めて読み取る必要がある。それによって利用の継承を持続させる新たな形態のデザインにつなげることも重要であろう。

形態も残存し利用も継承されており、記憶としても語られる場合は、すでに「歴史的なもの」として保存されていることも多いが、今後とも保存すべきであろう。以下「記憶の枠組み」を整理する。

4-3. 「記憶の枠組み」としての環境価値

以上より、記憶を記銘保持想起することを担保する「記憶の枠組み」としての環境の捉え方が整理された。そのような環境価値は、以下に列挙するように三点あり、従来の文化財の基準では担保できないものにも存在することが明らかになった。これらを将来の地域構想に活かすためには、新たな計画論が必要である。

(1)空間の価値の保持と再発見

「記憶の枠組み」の意義の一つ目は、記憶によって蘇る空間の価値への理解である。「歴史的なもの」として評価されたからこそ保存された町並みや山への眺望は、記憶が保持されるだけでなく新たに記銘されることや集合的記憶の形成にも貢献した。

また、佐原の場合でいえば、かつて大変な賑わいを見せた駅前の直線道路空間は、今では廃墟となったビルが並ぶシャッター通りに過ぎないが、賑わいの記憶が語られると、立地、幅や長さ等の規模、道路の形状による囲まれ感などによって、心地良い空間になり得る可能性を秘めていることが明らかとなる。

(2)現在から過去と未来をつなぐ時間感覚

二つ目の環境価値として、現在の空間を過去からのつながりとして捉える時間感覚を担保することが挙げられる。記憶によってそのような時間感覚を持つことができる。なぜなら記憶とは、現在の環境に触れることで営まれる行為だからだ。現時点から過去の方向を捉えるということは、現時点まで地域社会が続いてきた持続可能性を示唆する。つまり「記憶の枠組み」には、未来社会を構想するうえで、地域の特性や本質を理解することを可能にする有用性がある。

(3)記憶の共有の仕組み

「記憶の枠組み」の三つ目の意義は、個人の記憶を集合的記憶として共有する機能としての意義である。高度経済成長期以前の記憶

は、環境の維持管理の有り様と共に語られた。それによって多様で複雑な人間関係が生まれ、空間の利用のあり方は洗練されていった。そうした作法の結果として、今も観光客をひきつける魅力的な風景が生まれた。しかしそのような作法は失われ、風景の生成過程を実体験の記憶として持つ方が少なくなっており、このままでは消えてしまうことも懸念されるため、記憶の共有には緊急性がある。

こうした個人の記憶を集合的記憶にすることによって、地域社会という単位で空間と地域の暮らしの関係を構想する可能性が生じる。

謝辞

研究室学生と佐原の住民や市役所の共催「さわら昭和の記憶とくらし展」にて、来場者の歓喜の意味は何かという疑問に本研究は端を発する。皆様に感謝したい。また CREST 助成により水利用デザインの研究の機会をいただいたことも記して感謝する。

注

注 1) 西村(2004)48-68pp

注 2) 地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（2008 年施行、以下、歴史まちづくり法）により、自治体は、文化庁「歴史文化基本構想」をふまえる努力を要請されつつも、国土交通省による歴史まちづくり法のもとで策定される「歴史的風致維持向上計画」によって、観光による地域活性化や伝統的な暮らし方にヒントを得る持続可能なまちづくりの実現など、様々な目的のもとで「歴史的なもの」に取り組むことが可能になった。

注 3) 戦争や災害の記憶は、被害者か加害者かという立場によって、被害の規模や激甚さの度合いによって、同じ事象が対象でも全く違うものになる。マイノリティや被害者にとって自分の記憶を他人とは共有できないまま集合的記憶に回収されたり、忘却されるという事態への配慮が必要である。

注 4) 浜(2007)185p は「記憶の枠組み」の定義を明示しないが、アルヴァックスの集合的記憶を参照し、集団がそのときどきに用意している「記憶の枠組み」を用いて過去を想起する(もの)と述べる。プルースト『失われた時を求めて』では紅茶に浸したマドレーヌから記憶が想起される。

注 5) 北総台地に位置する佐原に人が住み始めたのは、縄文時代にさかのぼる。香取の海があったので、漁民たちが住み着いた。中世では、農村開発と荘園年貢を積み出す湊整備が進んだが、詳細はわかっていない。

江戸時代の利根川東遷以降は「利根川の大洪水は約十年に一回」と言われる程頻発した。利根川が銚子と江戸を結ぶ舟運路となり、佐原は重要な貿易湊となった。小野川沿いには「だし」が各商家により普請された。だしから荷を揚げた街路は作業場で、蔵にしまいやすいよう、大商家の蔵は敷地の奥ではなく小野川沿いに並んだ。現在の香取街道には店舗が並び清酒や味醂の醸造も盛んだった。1855 年「利根川図志」では佐原は佐原川(後の小野川)という項目において、下利根附第一繁昌の地なり、と紹介された。

注 6) 明治初期は蒸気船の航路が、関宿から利根川下流の銚子に延長され、明治 23(1890)年には利根運河が開通し、佐原-東京間の利便性は飛躍的に向上した。明治 15(1882)年には、小野川の佐原大橋が木造から石造隻眼橋になった。工費はすべて(隣村含む)地域住民の有志により、協橋(かなえ)と名付けられた。明治 25(1892)年大火後はすぐに多くの店舗が再建し土蔵だけでなく、現在も営業する中村屋乾物店のように、店蔵も佐原の重要な建築様式となった。明治 31(1898)年に成田鉄道佐原駅が開通し、連動した乗合馬車が登場、大正期には自動車導入、昭和 11 年(1936)年水郷大橋が完成、舟運から陸運への転換が決定的になる。大正 3(1914)年赤煉瓦の川崎銀行佐原支店(後に三菱銀行、現在町並み交流館)が建設され、洋風建築が相次ぐ。水害は相変わらず続いた。明治初期にはオランダの技術を導入したが、伝統的な近世の低水工事を基本とし、耕地や宅地は増えたが洪水の頻度は変わらなかった。利根川の洪水防禦工事は、明治 33(1900)年にはじまり、明治 43(1910)年関東大水害を受けて規模拡大、昭和 5(1930)年に完成した。その間にも、大正 8(1919)年に利根川氾濫で小野川逆流がないように逆水門扉が着工された。そこに架けられた小野川橋は、日本初の跳上式の可動橋だった。大正 2(1913)年には佐原町議会にて小野川の浚渫の議が可決、護岸工事も行われた。このときの自然石は今も一部残存している。

東京日日大阪毎日新聞社主催の「日本八景」等の選定に日本中が熱狂した。水郷利根は八景には入らなかったが二十五勝に選定された。その後も佐原を中心に水郷佐原観光協会設立、観光船就航、宿屋の増加等が続いた。

注 7) 戦後の混乱期も佐原の商業的な中心性は継続された。佐原駅北には昭和 26(1951)年、小野川から掘り込んだ佐原港が整備されたが、直後から舟運が陸運に変わり、生かすべき立地特性が薄れた。

既述の協橋は狭過ぎて増大する自動車量に対応できないという理由で、昭和 32(1957)年にコンクリート橋へと付け替えられ、忠敬橋へと名前も変わり歩道橋も整備された。袂には三階の鉄筋コンクリート造が建ち、小野川沿いには白いガードレールが設置され、どこにでもある景観となった。昭和 33(1958)年台風で小野川が氾濫して災害救助法の適用を受ける被害となり、小野川水門と排水機が整備された。完成した昭和 43(1968)年以降、大水害は起こっていない。昭和 45(1970)年には塩害防止と水需要対応のため、笹川下流に利根川河口堰が完成した。小野川沿いの道路整備と共に護岸整備が進み、昭和 49(1974)年多くのだしが取り壊された(平成 5(1993)年時点で佐原小学校から JR 線路間のだしは残存 2、取壊 49、新造 1)。

昭和 53(1978)年成田空港が完成し、交通網における佐原の中心性は益々薄くなり、1980 年代半ば以降の衰退は著しい。こうした状況を受けて、商工会等は佐原の大祭を生かした観光活性化をはじめた。

町並み保存調査が外部研究者や自治体主導で始まったのは 1970 年代半ばだった。昭和 63(1988)年ふるさと創生資金の活用にあたり住民主体の「佐原の町並みを考える会」(「小野川と佐原の町並みを考える会」に改称)が設立された。同会は町並み保存の意義や規制の説明を繰返すなど住民合意に尽力し、平成 8(1996)年重要伝統的建造物群保存地区選定のために、地区住民 92%の合意を得ることに貢献した。選定後は指定物件の修理が進んだ。小野川沿いでは周辺環境整備事業としてガードレールの偽木化、忠敬橋の歩道橋撤去、無電柱化が行われた。

昭和 40 年代に、駅の南側から北側の埋立地へと移転した香取市役所の周辺も、液状化被害により大規模建物が沈み路面が波打つ等の被害があった。

注 8) 東日本大震災の被災後もますます修理が進んだが本論文では触れない。

注 9) ただし、これが在郷町としての佐原の特徴か、自分が住み働いてきたまちを中心に捉えるのは人の性質なのかは本論文では明らかではない。

注 10) 修理した町家の新たな利用を行っている方へのインタビューによれば、当初から観光客をメインにした開業は基本的にはほぼない。地域住民が入る店でないと経営的にも苦しいという。実際、東日本大震災直後に閉店した土産屋は観光客向けの店だった。震災前から経営が難しかったという。

注 11) ただし現在の子供は、石尊山へは小学校の地域学習の一貫などで行く事はあるので認識はしているが、遊び場としてはあまり行かないという。

参考文献

1) 山田ら:新明解国語辞典第 7 版, 三省堂, 2012
2) Hayden, Dolores:The Power of Place, MIT Press, 1997（後藤春彦ら訳編著:場所の力-パブリック・ヒストリーとしての都市景観, 学芸出版社, 2005
3) 後藤治:都市の記憶を失う前に--建築保存待ったなし, 白揚社, 2008
4) 鄭一止:エコミュージアム運動としての「場所の記憶」の構造化に関する研究, 東京大学学位請求論文, 2012
5) 小田博志:エスノグラフィー入門：＜現場＞を質的研究する, 春秋社, 2010
6) 佐原市教育委員会:佐原の町並-佐原市伝統的建造物群保存地区調査報告-, 1975
7) 五十嵐梨香:歴史的町並みにおける河川空間の変遷に関する研究-香取市佐原・小野川を対象として-, 工学院大学修士論文, 2009
8) 小野川と佐原の町並みを考える会:佐原市佐原地区町並み形成基本計画, 1993
9) 観光資源保護財団:佐原の町並み：よみがえれ、水郷の商都, 観光資源調査報告 Vol. 11, 1983
10) 佐原市役所:佐原市史, 1966
11) 白井清兼他:旧佐原市地区におけるまちづくり型観光政策の形成プロセスとその成立要因に関する分析, 社会技術研究論文集 Vol. 6, pp. 93～106, 2009. 3
12) 東京大学大学院都市デザイン研究室佐原 PJ チーム:記憶でつなぐまちなかづくり, 平成 24 年度受託研究成果報告書(社会資本整備総合交付金事業), 2013
13) 東京大学大学院都市デザイン研究室佐原 PJ チーム:震災後の底力と町並み再生の原動力-佐原の復興の歩み, sur 報告書, 2012
14) 西村幸夫:都市保全計画, 東京大学出版会, 2004
15) アルヴァックス M:集合的記憶, 行路社, 1989
16) 中井久夫:徴候・記憶・外傷, みすず書房, 2004
17) 浜日出夫:歴史と記憶, 長谷川ら編著,『社会学』所収, pp171～200, 有斐閣, 2009
18) 港千尋:記憶-「創造」と「想起」の力, 講談社選書メチエ 93, 1996

STUDY ON THE MEMORY-EVOKING FRAMEWORK OF SAWARA, MERCANTILE HISTORIC CITY AT WATERY ENVIRONMENT

− Considerations of the relationship between memory and historicity −

*Aya KUBOTA**

* Special Appointment Prof., The Territorial Design Studies Unit, Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering, The University of Tokyo, Dr. Eng.

Sawara is a mercantile historic city at watery environment along the Tone River, which had been flourished from Edo era to the middle of Showa Era. The Tone River and its branch, Ono-River were used as a highway at that time. Because of the location, many vegetables and baggage gathered. Especially each shop, house and warehouse were put so much money. Because they create a beautiful and meaningful townscape, some parts of them have been designated as cultural property, namely a preservation district for a group of historic buildings.

In this paper, the mechanism of memory has three steps. The first is to register. The second is to keep or maintain memories. The final step is to recall. People may recall his or her memory when facing a kind of environment. We call such an environment 'Framework of Memory'.

Through minute interviews of local people, the memory-evoking framework of Sawara is clarified. The characteristics of those interviewees are and were acting in community development. The memories of Sawara consists of four conditions, 1) disappearance, 2) surviving figure, 3) inherited use, and 4) correspondence of memory and historicity.

As a result of interviews, we could understand the range of local life and daily jobs.

We held an exhibition at a vacant historical house. Three hundred and eighty people came to look at the old memories that were assembled in maps, pictures, texts and movies. In other words, they were handed over the memories of the local people. They could easily share the memories of busy streets because their fabrics are preserved. The concerns of Ono-River in memories are so deep. Local people often raise some explanations how they had kept the quality of Ono-River and some reasons why it became dirt. As the relationship between Ono-River and local life becomes disappearing, memories on Ono-River are also getting pale.

The paper makes it clear how the memories of individuals are shared with the others in the community. The memory-evoking framework and the system of historic value are very similar to but different each other. The local community can imagine how the life was in their habitat just by touching their surroundings. In Sawara, the physical environment built during the end of Edo and the middle of Showa is evaluated with important value. However, not just such historic environment that is already put in the formal preservation system, but also the fabrics with collective memories of local people are important to succeed the meaning of its lived environment.

Finally, the meanings of 'Framework of Memory' are summarized in three points. We can re-discover the value of spaces based on 'Framework of Memory'. We can gain an understanding on sense of past, present and future through 'Framework of Memory'. We can use 'Framework of Memory' as a system to share the image and the future vision of our town.

(2014年2月10日原稿受理，2014年8月15日採用決定)